

新聞を人生のパートナーに

100年時代



障がい者の自立へ 広がる貸農園

障がい者の雇用を進めたい企業に、働く場所を提供する貸農園が全国に広がっている。福祉目的の作業所よりも収入が多く、働く場所が少ない知的障がい者や精神障がい者の就労の受け皿になっている。指導員には定年後の第二の人生をスタートしたシニアの姿も。埼玉県川越市にある貸農園を訪ねた。(杉谷剛)

川越駅から車で20分



「わーくはびねず農園 さいたま川越第2」エスプールの提供

JRと東武東上線の川越駅から車で約20分、広い敷地に26の大きなビニールハウスが立ち並ぶ「わーくはびねず農園 さいたま川越第2」に着いた。間口約5㍍、奥行き約30㍍のハウスごとに、3人の障がい者とサポート役の農場長の4人チームで野菜を栽培する。オープンは2年前。ITや製菓など民間16社がそれぞれ一つから複数のハウスを賃借りして障がい者(計78人)と農場長(計26人)を雇用する。4月に空調設備大手・高砂熱学グループの「TMS」(ティーメス)が借りている二つのハウスを訪ねると、男女8人がミニ大根の収穫などをしていた。「本社の人たちに野菜を送って喜んでもらったときが一番うれしいです」と土屋成二さん(46)。知的障がいがあり、2年前に同社に採用されるまでは福祉作業所で16年間、宛名貼りや箱折りなどをしていた。「作業所の給料(工賃)は多くて月2万円くらいだった。給料が安いので、いい仕事に就きたいと思っていたとこ

ろ、作業所でここを紹介されました」週5日、1時間の休憩を挟んで1日6時間働く。「月給は十数万円で、生活費の残りは貯金しています。友だちも増え、ずっと続けていきたいです」育てていたのはチンゲンサイやレタス、ルッコラ、シュンギクなど10種類。50種くらいまで作れる。土の代わりに使うバミスサンド(軽石)を洗っていた男性の長谷川さん(26)は就労支

援施設の紹介で体験会に参加し、働くこと決めた。「農業の知識が得られるのがいいと思った。苦手だったコミュニケーションも改善されている感じ」定年を機に「人のお世話がしたい」と農場長になった矢作裕司さん(70)は「野菜作りそのものも楽しいけど、みんなの個性を伸ばすようにするのが、この仕事のやりがい」と話す。女性の農場長の刈谷さん(54)は「子

友だちも増えた



チンゲンサイを収穫する土屋さん(左)とスタッフ。農場長の目が行き届くように、チーム3人までとしている

作業所より高収入 ■ 高齢者らサポート

育てを終え、結婚前にしていた介護の仕事を探していましたが、誰かの役に立つなら同じだと思い応募しました」。作業は種まき、水やり、間引き、ムシ取り、袋詰めなどで「ざっと全体の6割が作業、4割が農業などの勉強」と刈谷さん。民間検定にも挑戦し、全員が国連の持続可能な開発目標(SDGs)の理解度を測る「サステナ経営検定4級」を取った。TMSの奥山裕司・経営企画部長は「障がい者の自立支援を進めるため、身体障がい者を中心に事務系で採用してきたが、制度変更で、知的障がい者にも一定割合の職場を提供する必要が出てきた。ただ、配属の限界で、雇用を増やすのが難しくなっていた」と農園を借りた理由を話す。笠原浩子・同社サステナビリティ推進室長はスタッフ管理について「月に



採れた野菜の一部

法定雇用率 障がい者雇用促進法で、企業は従業員的一定割合以上の障がい者を雇用する義務がある。雇用率は現在2.5%(従業員40人に1人)。未達成の場合、不足1人につき月5万円を徴収され、達成企業に調整金などが支給される。昨年の達成企業は全体の約半数で、民間で働く障がい者は約64万人。身体障がい者が56%、知的障がい者24%、精神障がい者20%。

2~3回こちらに来て面談し仕事や体調、コミュニケーションが取れているかなどを聞きます。社内で野菜の配布会や試食会を開催。子ども食堂にも寄付する。社員からのお礼のメールや配布会などの写真をスタッフに送り、社員研修を農園で行うなど交流も図る。農園を開設・運営するのは障がい者の就労支援などを行う「エスプールの」(東京)。区画ごとに企業に貸し出し、働き手の紹介も行うビジネスモデルを開発、2010年から首都圏や愛知、大阪の50カ所で、屋内型を含めて運営する。現在約600社が利用、約4千人が働く。貸農園やサテライトオフィスによる障がい者雇用事業は、20社以上が参入するなど広がっており、厚生労働省は22年度に実態を調査。障がい者の能力の開発・向上につながる好事例や、単に雇用率達成のみを目的とした疑義のある事例などもあったと公表した。「もともとエスプールのは雇用機会に恵まれない人の雇用を創ろうと、就職氷河期の若者からスタートし、ひきこもりの人やフリーター、主婦ら、さらに身体障がい者よりも就職率が低い知的障がい者の、就労支援を行うようになりました」。エスプールの和田一紀社長=写真=はそう話す。「障がいによりお金が稼げず、自立できないという課題を解決したい。仕事があれば、そこには仲間もいる。働く場とコミュニティーを提供していきたい」

